

「立ち上がる農山漁村」選定案概要書

取組分野：【交流】

1. 都道府県、市町村 三重県<sup>たきちよう</sup>多気町
2. 事業者名 水土里ネット立梅<sup>たちばい</sup>用水
3. 取組みの名称 心豊かな里づくりによる都市住民との交流
4. 取組概要等

概要

旧勢和村には、祖先の残した水や土（農業用水や農地）、それを育んだ歴史や文化といった大切な資源が多くあるが、昭和60年代には農業の近代化の中で変容を遂げ、人々の関心も薄らいでいた。そのような状況を憂えた村の人達による地域資源の良さを再認識させるための活動が平成5年頃に村内各所で始まった。

現在も「ふるさとの水と土を大切に」を合言葉に地域の人々と水土里ネット、行政が協働し、地域資源の「保全」・「増進」・「活用」というさまざまな活動を行い「心豊かな里づくり」を進めている。

平成5年に始まった用水路と水田とアジサイを一つの風景としてとらえてほしいとの思いから、1万本を目標に用水路沿いや水田の周りにアジサイを植える「あじさい1万本」運動（平成13年、目標達成。その後も植栽を継続。）や、平成9年から「ふるさとの水と土に感謝して」をうたい文句に、休耕田や用水をイベントの舞台として活用した「大師の里 彦左衛門のあじさいまつり」の開催等の「あじさいいっぱい運動」による交流は様々な情報交換や地域間協力の場となっている。

また、休耕田を活用した「農村のビオトープ（「メダカ池」）づくりを進め、絶滅危惧種のメダカやタガメなど水性生物を繁殖させる活動を実施、平成13年からは「ヘイケボタルの里」の名で休耕田を活用したビオトープをもう一つ作り、ヘイケボタルの生態研究を実施している。

そのほか、平成10年から、長くかんがい用水として維持活用してきた立梅用水を地域全体の大きな資源としてとらえ直し、農家と地域社会とが調和を保ちながら施設や農地を多面的活用していくことを目的とした「あぜ道とせせらぎづくり」活動を開始し、里山ウォーキングや環境教育等により農業用水・農業・農村に対する理解を深める活動が進められている。

活動の推進には、可能な限り多くの人の協力を得ることが重要であると考え、土地所有者や地域住民はもとより、民間企業等の協力を得ることに努力し、多様な参加主体による活発な活動が行われている。

活動の規模

項目	H13	H14	H15	H16	H17
イベント回数	30	30	40	40	
解説	単位：回				
イベント参加者	15,000	15,000	20,000	20,000	
解説	単位：人				

活用している地域資源

- ・立梅用水
- ・勢和村内の水や土（農業用水、農地）
- ・アジサイ
- ・農村のビオトープ
- ・丹生大師の里（水銀文化）
- ・元丈の里（薬草・薬樹）
- ・地域ボランティア
- ・集落営農組合

地域活性化のポイント

村内外の人々が水環境への関心を持ち始めただけでなく、先祖が大切に守り伝えてきた郷土の水や土、歴史や文化といったものに目を向けるようになった。その結果、大手企業や大半を都市住民で構成する「ふるさと応援団」等多様な主体の参加・支援を得ることができるようになった。

また、村から持ち帰ったメダカで「めだかの学校」を開校する町があり、地域間の交流の輪が確実に広がりつつある。

村の中では、様々な活動に触発され、ハーブづくり、花づくり、味噌づくり、伝統文化継承など新たに様々な活動を行うグループが誕生し、地域の活性化に取り組んでいる。

また、自らの地域を見直す取組は、それまで何気なく食べていた地元産の米の品質の高さを再発見し「彦左衛門のうまい米」としてブランド化するなど、村の潜在的な魅力を再発見することにもつながっている。

事業の今後の展開方向

「都市住民との交流＝資源保全と地域の活性化」を目的に、これまで連携して地域資源の「保全・増進・活用」を進めてきた様々な主体の参加による地域資源保全・活用協議会を設立し、近年の農業・農村が食料生産の場としての役割に止まらず、国民の社会的共通資本としての新たな役割が求められている現状を踏まえ、あらためて地域の課題を整理し、地域資源の保全・活用を行うためのネットワークづくりを進めている。

